

ヤスパーズ哲学における「例外者」

—ヤスパーズにおけるキェルケゴール思想の受容の観点から—

中村元紀（東洋大学大学院）

genkygehen@gmail.com

問題設定

本発表は、ヤスパーズの実存概念（ヤスパーズ哲学の用語で言えば、実存の「しるし」（*signa/die Signa*）¹⁾）を、特にキェルケゴール思想の受容の観点から検討するものである。

ヤスパーズは、「私の『哲学』へのあとがき」（1955年）²⁾という小論の中で、「私は、キェルケゴールの実存という「概念」を自分のものにした」（*Ph.I S.XX*）³⁾と述べている。だが、同じ文章の中で彼は、「私はキェルケゴールの信奉者にはならなかった」（*ibid.*）とも述べる。この二つの発言は、ヤスパーズが自らの実存概念を、キェルケゴールに大きく依拠しながら構築しつつも、その後者の思想に全面的に同意していたわけではないことを示唆している。本発表では、これまでの先行研究を踏まえながら、キェルケゴールに由来する「例外者」（*Ausnahme*）という概念に焦点を絞り、その概念の受容がヤスパーズの実存概念の構築においてどのような役割を果たしたのかを検討することにした。

本発表における考察の手順は、以下のとおりである。まず、『哲学』の中で、キェルケゴールの言葉としてとりあげられている、「否定的決意」（*negativer Entschluß*）についての考察を行う（第1節）。次に、その否定的決意に対する理解をもとにして、ヤスパーズが、のちの『理性と実存』の中で、どのように例外者を位置づけたのかについて考察する（第2節）。

第1節 『哲学』における「否定的決意」

ヤスパーズ研究者林田新二が述べるとおり、『哲学』とは、あるべき<この私>という本来的自己存在を意味する「実存」（*Existenz*）を主題として論じる著作であり、また、ヤスパーズ哲学前期の主著として位置づけられる著作でもある⁴⁾。

そして、その『哲学』の中で、ヤスパーズは、実存を体現するあり方の一つとして、「宗教的世界否認」（*religiöse Weltverneinung*）（*Ph.II S.318*）をとりあげる。それは、「私

が、無世界的に (weltlos)、また交わりを欠く仕方で (kommunikationslos)、超越者 (Transzendenz) のみに連繫されつつ、この超越者のために、あらゆるものを否定しようと欲する」(Ph.II S.319) 宗教的な態度のことである。つまり、世俗的な価値観においては、あるべき<この私>としての存在意義を見いだすことができないため、そうした現世を一切徹底的に否定し(「無世界的に」)、また他者との「交わり」(Kommunikation)を一切断ち切って(「交わりを欠く仕方で」)、一人孤独の中で、実存の存在根拠である「神性」(Gottheit)、いわば「超越者」(Transzendenz)⁵と真剣に向き合うことで、あるべき<この私>を見いだそうとする、宗教者としての生き方を意味するものである。そのため、こうした生き方は、ヤスパースの述べる「現存在」(Dasein)、すなわち、現世における富や名声や権力等を勝ち得ることを通して、「現に今存在すること」(Dasein)を充実させようと試みる生き方を否定するものである。

そのように宗教的世界否認に生きる者は、「例外者」(Ausnahme) (Ph.II S.320)とも呼ばれる。そうした例外者は、上述のとおり、世俗的な価値観を一切否定し、そのうえで、世俗の中で充実しようとする生き方をあえてしまい、と決意し、それを実行に移そうとする。いうなれば、例外者は、「否定的決意」(negativer Entschluß) (Ph.II S.319)を実際に遂行する者である、と言えよう。

そして、この否定的決意は、キェルケゴールの著作の中で登場する言葉である、とヤスパースは述べる。ヤスパースは、その出典を具体的に明らかにしてはしていないが、キェルケゴールがその否定的決意について言及しているとする箇所をとりあげ、引用する。長い引用になるが、本発表において否定的決意について議論するうえでも、重要となる箇所であるため、以下に示す。

…(略)…肯定的決意は、現に今存在することの中へ進み、自らの世界を獲得するが、否定的決意は、常に漂っている。肯定的決意は、生に対して、…(略)…幸福を通して、ある一つの確かさを与える。その肯定的決意は、日に日に進んで、…(略)…根源的な根底の中へと深く入っていく。否定的決意は、生成することなく、不確かなままであり、また現に今存在することとの闘いの中で、曖昧なままである。…

(略)…否定的決意は、永遠なるもののみを欲する。…(略)…否定的決意は、世界の内に足場を固めることができない…(略)…

この引用をもとに、否定的決意こそ、キェルケゴールという思想家を表す特徴の一つである、とヤスパースは主張する。

このヤスパースの主張をとりあげたうえで、多くの哲学者や研究者たちは、「ヤスパースは、キェルケゴールを、否定的決意を実行した人物として評価している」と指摘する⁷。しかし、依然として、この否定的決意の出典が、キェルケゴールのどの著作からのものなのかについては、これまでの研究において、具体的に明らかにされてはいない。

そこで、本発表において、この否定的決意の出典を明らかにしたうえで、キェルケゴール研究上の内在的な理解を踏まえながら、その出典の中で語られている否定的決意についての意味内容をより深く理解していくことにする。それにより、ヤスパースが理解したキェルケゴールの否定的決意とは何だったのかについて明らかにしていく。

まず、この否定的決意は、キェルケゴールの『人生行路の諸段階』という著作の「第二部 結婚についての様々な考え—ある結婚した男性による反論」という章の中で登場する言葉であることがわかる。

その論拠として、ヤスパースが引用した箇所と思われる、『人生行路の諸段階』の文章を提示する。繰り返しを厭わずに述べるが、ヤスパースの理解したキェルケゴールの否定的決意について考察するうえでも、重要な箇所であることから、長文ではあるが、その該当箇所を以下に記す。

肯定的決意は、現に今存在することを堅牢にし、また個人を肯定的決意自らの中で安らぎへともたらずという長所を持っている。否定的決意は、相も変わらず現に今存在することを不安定にさせる。… (略) …肯定的決意は、生に対して、自らの幸福な結果を通して、確かさを与える。… (略) …たとえ否定的決意が幸福とともに成し遂げられようとも、否定的決意は、常に曖昧である。… (略) … [否定的決意を行った] 個人は、現に今存在することとの闘いを始める。それゆえ、個人は、…

(略) …肯定的決意の場合のように、日に日に進んで、自らの決意という根源的な根底の中へと深く入っていくことができない。… (略) …その否定的決意は、生の

中で、決して足場を固めることができない。… (略) …否定的決意は、永遠なるもののみをとらえる… (略) …。

(*Stadien auf dem Lebensweg*, *GuS4* S.93ff. ; *H15* S.112ff.)⁸

本発表の註において、『哲学』の中で語られている否定的決意に関する文章の原文と、先ほど示した『人生行路の諸段階』の中で語られている否定的決意に関する文章の原文を付記し、それぞれの原文を照らし合わせたところ、ヤスパースは、『人生行路の諸段階』の内容を原典どおり一言一句正確に引用しているわけではないが、その内容の大筋を、ヤスパース自身で要約し、それを引用として用いたということがわかるであろう。

次に、『人生行路の諸段階』の中で語られている「肯定的決意」および「否定的決意」の意味内容について考察していく。

先ほど提示した引用の文章は、キェルケゴール研究者小川圭治が述べるとおり、「すでに『あれか・これか』で倫理的段階を代表する仮名の著者として登場した「判事ヴィルヘルム」⁹が、「肯定的決意」および「否定的決意」について論じるものとなっている。そのため、正確に言えば、この文章は、キェルケゴール本人が書いた文章ではなく、仮名著作者「判事ヴィルヘルム」による文章であることが言える。

しかし、キェルケゴール研究者 G.マランチュックが述べるとおり、この『人生行路の諸段階』における判事ヴィルヘルムは、以前の『あれかーこれか』とは、少し勝手が異なったものである¹⁰。つまり、『あれかーこれか』の時点では、判事ヴィルヘルムは、単に倫理的段階を表明する者として登場していたが、いまや『人生行路の諸段階』において、審美的なものとの立場と宗教的な立場のものとの中間に立って、それぞれを弁護しなくてはいけない立場に立たされている¹¹。判事ヴィルヘルムは、『人生行路の諸段階』の「第一部 酒中に真あり」の中で記されている、五人の審美家の主張に対しては否定的な態度をとり、かつ反論を試みているが、それは、判事ヴィルヘルム自身が審美的な立場へと引きずられそうになっているのを、自ら必死で食い止めようとしているからに他ならない¹²。他方、宗教的例外者であるクイダムに対して、判事ヴィルヘルムは、信仰に際して伴う彼の困難に理解を示しつつも、クイダムが宗教者の向かうべき「狭路」へと踏み進もうとすることについては、強く警告を発する¹³。

そうしたことを踏まえつつ、判事ヴィルヘルムの述べる「肯定的決意」および「否定的決意」の意味内容について考えていきたい。

まず、判事ヴィルヘルムは、自ら見初めた伴侶と結婚しようとする決意を「肯定的決意」(der positive Entschluß) と呼び、逆にあえて結婚をしないという決意を「否定的決意」(der negative Entschluß) と呼ぶ (*Stadien auf dem Lebensweg, GuS4 S.92 ; H15 S.111*)。

次いで、判事ヴィルヘルムは、肯定的決意が為す「結婚において、私は個人が現に今存在することの最も高いテロスを見る」(*Stadien auf dem Lebensweg, GuS4 S.86 ; H15 S.105*) と述べたうえで、「肯定的決意は、時間的なものと同時に永遠的なものをとらえる」(*Stadien auf dem Lebensweg, GuS4 S.96 ; H15 S.116*) と述べる。

キェルケゴール研究者榊田啓三郎によれば、キェルケゴールの著作の中で登場する「現に今存在すること」、すなわち、「現存在」(Dasein) とは、厳密に言えば、「人の世に生きること」ということを意味する語であり、そのデンマーク原語である「Tilværelse」も、第一義として「(生物とくに人間が) この現実の世界に生きること」を意味する語である¹⁴、としている。

つまり、判事ヴィルヘルムのいう「肯定的決意」とは、「現に今存在すること」(Dasein) に自らの存在意義を見出し、それを充実させる生き方をするための決意であると言えるが、それは、五人の審美家のように、単に審美的なものに享受するような生き方をするための決意ではない。むしろ、判事ヴィルヘルムが肯定的決意において見出すのは、自分の愛すべき伴侶と結婚しようとする決意し、またそれを実行に移すことで、「時間的なもの」(das Zeitliche) である世俗だけではなく、「永遠なるもの」(das Ewige) である「神」(Gott) と繋がりを保ちつつ、「現に今存在すること」(Dasein) ができるとする、より倫理的な生き方である。

こうした判事ヴィルヘルムの主張は、宗教的例外者クイダムのことを想定して為されたものと考えられる。つまり、判事ヴィルヘルムは、肯定的決意の有意義さを唱えることで、否定的決意を断行しようとするクイダムをたしなめようとした、ということが考えられるのである。

そのため、判事ヴィルヘルムは、次のように、否定的決意を行う者を揶揄する。否定的決意を行う者は、時間的なものを一切否定し、永遠なるもの、すなわち、神のみを求めて信仰を続けるが、それでも人間は、世俗にまみれる生き方をせざるを得ないがゆえに、

「現に今生きることとの闘い」(Kampf mit Dasein)¹⁵を続け、苦悩し続ける者である
(*Stadien auf dem Lebensweg*, *GuS4* S. 95 ; *HI5* S.115)、と。

だが、否定的決意を行う者に長所があるとすれば、それは、「現に今存在すること」のために、世俗的な価値観に基づいて幸福になることが、果たして本当の幸福と言えるのだろうか、また、そうした世俗的な幸せのみで、「これこそこの私>だ」と呼べるような自己確信を得ることができるのだろうか、という仕方では、世俗的な価値観の幸福に対して疑問を抱き、それによって、自らの自己意識を深めること、すなわち自覚化を推し進めようとするのであり、と云えよう。

その点で言えば、「いまや、否定的決意は、生との関わり合いを通して、個々人に対して、その肯定的決意よりも多くより強い仕方では、意識〔自覚〕をもたらず」(*Stadien auf dem Lebensweg*, *GuS4* S.86 ; *HI5* S.112)¹⁶ものである、と云うことができよう。

さきほど挙げたこの文は、否定的決意を為そうとするクイダムに対する判事ヴィルヘルムなりの配慮が示されたものと考えられる。しかし、「この文は、キェルケゴール自身の出来事から理解されるべきだ」、と唱えるキェルケゴール研究者 E.ヒルシュは、この文を、婚約者レギーネと結婚する義務があったにもかかわらず、その後婚約を破棄した、キェルケゴールの実人生と重ねあわせて考える (*Stadien auf dem Lebensweg*, *HI5* S.539, *Anm.119*)。つまり、『人生行路の諸段階』の中で書かれている否定的決意とは、自らの求める信仰ゆえに、キェルケゴール自身が行ったレギーネとの婚約破棄そのものを意味するものである、とヒルシュは考えるのである。

キェルケゴール研究者工藤綏夫によれば、そもそもキェルケゴールが仮名著作を記す理由として、「まず第一に考えられること…(略)…は、これらの著作が、結婚によって結ばれることを断念するほかなかった恋人、レギーネを目標にして書かれたものであった」¹⁷ということを経験することができる、とする。つまり、実名で書くと、自分とレギーネとの関係を世間にさらすことになり、それによって、世間から要らぬそしりをレギーネが受けることになれば、レギーネを傷つけてしまうことになりかねない。そのため、恋人レギーネへのひそかなる愛の訴えとしては、仮名著作による表現こそがもっともふさわしい、とキェルケゴールは考えたのであり、すくなくとも、初期の作品である『あれかーこれか』、『反復』、『人生行路の諸段階』においては、レギーネに対する配慮が特にあったものと工藤は考える¹⁸。

つまり、『人生行路の諸段階』において、キェルケゴールは、仮名著作者判事ヴィルヘルムを通して、「肯定的決意」の有意義さを強調することで、かつての婚約者レギーネに対する愛を表明しつつも、「否定的決意」を断行する宗教的例外者クイダムの姿を通して、自ら求める信仰のゆえに、レギーネとの婚約を破棄せざるを得なかった自らの本心を、隠された形で吐露しようとした、ということを見て取ることができるだろう。

では、キェルケゴールの求めたキリスト教信仰とはどのようなものだったのか。それは、真に新約聖書のキリスト教に忠実な信徒であろうと自ら欲して、「悟性」(Verstand)という合理的・論理的な思考によって神を理解しようとする組織体としてのキリスト教やそれに盲従する大衆などといった、世俗的で表面的な信仰を行う者に対して反抗するが、それゆえに苦悩や葛藤に苛み、その結果自ら死ぬことになろうとも、それでも自ら真理として見出した神に徹頭徹尾帰依する「殉教者であろうとすること」(Martyrium)¹⁹である。この殉教者であろうとすることは、キェルケゴール研究者飯島宗享によれば、「キリストに従うとは模範としてのキリストを生きること」²⁰、すなわち「キリストの「まねび」」²¹を意味するものであり、それは、キェルケゴール思想における実存三段階でいえば、<宗教性 B> (Religiosität B) の段階にあたるものと言える。

そうした生き方ゆえに、飯島によれば、「神との関係においてその生活が異例的にならざるを得ない人のことを」²²、キェルケゴールは、「例外者」と呼ぶのである²³。

そうしたキェルケゴールの否定的決意を、ヤスパースもまた、レギーネとの婚約破棄というキェルケゴールの実人生と重ね合わせて理解する。そのため、ヤスパースもまた、肯定的決意を行う例外者は、「現に今存在すること」(Dasein)のみを幸福と見なす者に対して問いに附し (Ph.II S.320)、またそうした問いを通じて、あるべき<この私>とは何かを探求する、いわゆる「哲学すること」(Philosophieren)の契機を与えてくれる存在である、と例外者を評価する。

たしかに、ヤスパースも、キェルケゴールにならい、人間は一人孤独の中で自身の内面性に向き合い、かつ自身の存在根拠である「神」(ヤスパースの言葉を用いれば「超越者」)に対峙するとき、実存を体現するものとなる、と考える。

その点で言えば、「実存とは、実存自身に関わるものであり、かつ、その実存自身に関わることの中で、実存自らの超越者に関わるものである」(Ph.I S.15)とヤスパースは述べるが、それは、キェルケゴールの『死に至る病』の冒頭に登場する、いわゆる<関係とし

での自己²⁴にならった表現であると言えるのであり、またこの類似性に関しては、多くの研究者たちが指摘するところでもある²⁵。

またさらに言えば、そうした実存を体現する者こそ、例外者と表現されるものであり、キェルケゴール研究者 W.フォン＝クローデンのいうとおり、「孤独」という主題は、「例外者」という主題にも言及するものであり、また両概念は、キェルケゴールおよびヤスパーズによって、人格的〔人柄的〕な行為と結びつけられたものである²⁶と行うことができよう。

しかし、ヤスパーズ研究者 W. シュスラーが語るように、「神人キリスト」を、ヤスパーズは、一つの史実的な事実に集約された「権威の歴史的な統一」であると見なす²⁷。それゆえ、ヤスパーズは、キェルケゴールから多くのことを学んだにもかかわらず、キェルケゴールの語る「キリストのまねび」であろうとする〈宗教性 B〉に追従することができず、むしろそれを拒否する態度をとるのである²⁸。

そもそも、〈宗教性 B〉というこうした例外者の生き方は、自らを犠牲 (Opfer) にする生き方であり、それはあたかも自死 (Selbstmord) に類するような生き方である (Ph.II S.320)。そうした〈宗教性 B〉を、キェルケゴールが強要しているように感じたヤスパーズは、のちの『私の『哲学』へのあとがき』において、「キェルケゴールの〈宗教性 B〉は、あたかもキリスト教の終焉や各人の哲学的な生の終焉を意味するよう感じられた」 (Ph.I S.XX) と語る。

こうした例外者の生き方は、模範 (das Vorbild) にはなりえないものである (Ph.II S.320)、とヤスパーズが語るように、ヤスパーズ自身もまた、キェルケゴールの信奉者になるどころか、むしろ、キェルケゴールを模範にして、例外者としての実存へと至ろうとすることさえできなかったのである。

第2節 『理性と実存』における例外者論

こうした『哲学』における否定的決意の理解をもとに、ヤスパーズは、のちの『理性と実存』において、例外者という概念を本格的に論じ始める。この著作では、キェルケゴールとニーチェの名を挙げつつ、例外者についての論述がなされている。しかし、その論述は、ニーチェ以上に、キェルケゴールに関する記述をより多くとりあげる仕方で、行われているものである。また、この『理性と実存』を読み進めていくと、前著である『哲学』

の中で述べられた「否定的決意」をおおよそもとにして、例外者論が展開されていることがわかる。

まず、ヤスパーズは、キェルケゴールとニーチェを、自らの主体的なあり方でもって、自己固有の真理を探求しようとしたがゆえに、その時代の代弁者となることなく、むしろ、逆にその時代の中で疎外された「例外者」(die Ausnahme) となった人物として紹介する (VE : in SzEx, KJG I/8, S.12)。

こうした「例外者であること」と結びついた恐るべき孤独は、〔キェルケゴールとニーチェの〕両者にとって共通である」(VE : in SzEx, KJG I/8, S.22)²⁹わけだが、そうした孤独の中で、キェルケゴールとニーチェの両者は、「自己反省」(Selbstreflexion) (VE : in SzEx, KJG I/8, S.15) を行うことを通して、自己固有の真理である「超越者」をひたすら探求しようとする (VE : in SzEx, KJG I/8, S.18)。例外者であるこうした両者の姿勢は、あるべき<この私>を求めよ、と人々に訴えかけ、また人々を「実存」へと目覚めさせてくれるものである、と言えよう。

しかし、そのようにして、超越者へと向かう例外者の姿勢は、容易に追従することのできないものでもある。その姿勢は、キェルケゴールで言えば、「不条理な逆説として、完全なる現世放棄という否定的決意として、また、必然的に殉教者であるということとして解釈されたキリスト教」(VE : in SzEx, KJG I/8, S.18) を求めていくことになる。しかし、それをそのまま踏襲しようとするれば、結局のところ、人は死を遂げゆくものになってしまう。

そのため、「例外者の真理は、我々にとって、絶えず問いに附すものなのであり、もしこの問いに附すということがなければ、我々は、多かれ少なかれ、徹底的に思索を行おうとしない自己満足という粗雑な自明性の中へと再び沈み込むことになる」(VE : in SzEx, KJG I/8, S.83f.) とヤスパーズは述べる。つまり、例外者が主体的な真理を見出そうとすること自体、実存のあり方であると言えるが、自ら見出した主体的真理を絶対化し、それに固執し続けるような実存のあり方に対しては、ヤスパーズは批判的なのである。

そこで、ヤスパーズは、実存においても、「理性」(Vernunft) が必要不可欠なものとして存在する、と主張する。

ヤスパーズにとって、「理性とは、たえざる不満 (ein ständiges Ungenügen) を表現する」(VE : in SzEx, KJG I/8, S.39) ものである。つまり、あるべき<この私>についての真理

を真に探求する者は、自ら見出した主体的な真理に固執し、自己満足に至ることなく、むしろ、その真理が本当に正しいかどうかを、他者との「交わり」(Kommunikation)において果てしなく検証しようと試みる者であり、その場合、その者はある種の理性が備わっている者と言える、とヤスパースは述べるのである。ここで唱えられたヤスパースの理性は、いわば、ヤスパース研究者中山剛史が呼ぶように、<交わりの理性>³⁰であるということもできよう。

こうしたヤスパースの理性に対する考え方は、「私の『哲学』へのあとがき」において記されている、ヤスパースの哲学は理性が脆弱であるという非難(Ph.I S.XLVII)に対応するものであったと考えられる。

だからこそ、「実存は、理性を通して自ら聡明(hell)となり、理性は、実存を通して内実を有する」(VE: in SzEx, KJG I/8, S.40)と記されているように、ヤスパースにとって実存と理性は、両極の存在として互いに対峙しつつも、互いに連関しあうものである。「感情、体験、疑うこともない衝動、本能、恣意にすぎると、理性の欠いた実存は、盲目的な暴力性(Gewaltsamkeit)の内へと陥る」(VE: in SzEx, KJG I/8, S.40)ように、実存および理性のどちらか一方が欠けてしまうと、それは、本来あるべき実存のあり方、ならびに、本来あるべき理性のあり方を失うことになる。そのため、改めて言うならば、例外者が、自ら見出した主体的な真理に固執し続ける場合、その場合の例外者は、理性の欠いた実存に陥った存在である、とすることができよう。

ヤスパースにとって実存とは、他者との交わりへと働く理性をも備えた実存なのである。ヤスパース研究者林田新二の言葉で言えば、<理性的実存>³¹である、と呼ぶことができるであろう。

フランスの実存思想史家ジャン・ヴァールがいうとおり、「ここで我々は、ある一つの逆説を見て取る。ヤスパース自身は例外者ではない。哲学の教授である彼は、キェルケゴールとニーチェとして存在したそれら二人の例外者を考慮しつつ哲学する」³²ことを試みるのである。

そのため、ヤスパースもまた、「我々は、例外者であることなしに、例外者を見つめつつ、哲学する」(VE: in SzEx, KJG I/8, S.83)³³必要がある、と読者に訴えかけるのである。

しかし、こうしたヤスパースの主張に対して、キェルケゴール研究者飯島宗享は、異議を唱える。飯島によれば、キェルケゴールの求める<キリスト教的実存>とは、本来、キ

リストにまねぶことを通して、神に赦しを請うことで、神の恩寵にあずかろうとすることを目的とするものである³⁴。そのため、「例外者であることなしに、例外者を見つめつつ、哲学する」というヤスパースの姿勢は、キリストのまねびを客観的に理解することを通して、神の赦しを先取りしようとするものであり、それは、キェルケゴールの求めた<キリスト者的実存>に反するものである³⁵。キェルケゴールの求めた<キリスト者的実存>を忠実に求めるならば、「例外者を凝視しながら、例外者たることなしに」ではなく、「一般者を凝視しながら、一般者たることなしに」、自らの実存を探求しなくてはならない³⁶。そのように、飯島は、ヤスパースを批判する。

しかし、先述したとおり、ヤスパースは、キリストのまねびであろうとする、そうした<宗教性 B>を拒否しており、それは、そうした<宗教性 B>というあり方が、独善的なもので、なおかつ、それを他者に強要するものとして存在しているかのように感じられた、という理由からである。

そのため、ヤスパースの求める実存とは、キェルケゴールの求めるそれとは異なり、いふなれば、<哲学的実存>である、とすることができる。要するに、ヤスパースは、キェルケゴールの宗教的例外者としての生き方に関しては忌避しながらも、そうした例外者のあり方から、実存の要諦を把握しつつ、またそれをあくまで哲学という領域にとどめて論じることで、独自の实存哲学を自ら構築しようとして試みた、とすることができるのである。

ヤスパース哲学において、キェルケゴールの例外者という概念は、実存を論じるうえでも、また独善的な真理へと埋没するような実存を超えて、果てしなく他者との交わりを求めていこうとする理性の働きを論じるうえでも、なくてはならない存在であったのである。

結語

以上の考察から言えることとして、ヤスパース研究者布施圭司の述べるとおり³⁷、キェルケゴールの求める実存とは、我々の世界を超えた存在である「キリスト」に関わることを意味するのに対して、ヤスパースの求める実存とは、我々の世界の内にとどまりながらも、その中で出会うことのできる他者との「交わり」を行うことを意味した、ということを経ることができよう。

ここに、キェルケゴールとヤスパースにおける思想の相違点を認めることができる。

ヤスパースはたしかに、孤独の中で自分自身と向き合いつつ、それと同時に、自己固有の真理である超越者を探求する例外者のあり方を、キェルケゴールから学び取った。またそれを真のキリスト者であろうとして、自らの生をも賭して、殉教者であろうとするキェルケゴールの姿に、ヤスパースは例外者という実存が現実化している姿を見た。

しかし、ヤスパースは、このような例外者としての実存を認めながらも、それが他者との交わりを拒絶する点については批判を加えていく。他者の交わりを否定することは、自らの真理を絶対化し、他者にもそれを強要する独善的なものである、と彼は考えた。

ヤスパースの述べる真の実存とは、そうした例外者のあり方を尊重しつつも、同時に他者との交わりを求めていく存在のことを意味していたのである。

凡例

一、本発表中に記されている傍点は本発表執筆者の強調、[] は本発表執筆者の補足、「」は引用文中に記されている重要語句、<>は本発表執筆者自身の言葉で設定し、強調する重要語句、をそれぞれ意味する。

一、ヤスパースの著作にて、最新版の『ヤスパース全集（原題：Karl Jaspers Gesamtausgabe）』を用いた場合、引用箇所を示す際は、著作名の略号、KJG、巻数、頁数の順に記す。

一、ヤスパースが主に引用するキェルケゴール著作集が、ドイツ語版ゴットシェードおよびシュレンプフ訳（Gesammelte Werke, übersetzt und hg. von H. Gottsched und Chr. Schrempf, Jena, 1909-1922. 以下、訳者の頭文字を取って、GuS と略記）であることから、本論文では、その著作集を用いることにする。また補足として、ドイツ語版ヒルシュ訳

（Gesammelte Werke, übersetzt und hg. von E. Hirsch u.a., Düsseldorf, Köln, 1950-1969. 以下、訳者の頭文字を取って、H と略記）をも用いることにする。そのため、引用箇所を示す際は、著作名、GuS、巻数、頁数、H、巻数、頁数の順に記す。上記以外のキェルケゴールの著作を用いる場合は、その都度出典を明記する。また、翻訳に際しては、邦訳『キェルケゴール著作集』（白水社）を参照した。

ヤスパースの著作とその略号

*Ph.I-II : Philosophie. 3.Bde. (1932) , Bd.I : Philosophische Weltorientierung., Bd.II :
Existenzerhellung., 4.Aufl, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973.*
*SzEx : Schriften zur Existenzphilosophie. Karl Jaspers Gesamtausgabe Band I/8, hg. von Dominic
Kaegi, Schwabe Verlag, Basel, 2018.*
VE : Vernunft und Existenz. Fünf Vorlesungen (1935) , 4.Aufl, München, 1960 : in SzEx
*W : Von der Wahrheit. Philosophische Logik. Erster Band (1947) , 4.Aufl, R. Piper & Co. Verlag,
München, 1991.*
*NLI : Die Grossen Philosophen Nachlaß I. Darstellungen und Fragmente, hg. von Hans Saner,
unter Mitarbeiter von Raphael Bieland, R. Piper & Co. Verlag, München, Zürich, 1981.*
*AP : Aneignung und Polemik. Gesammelte Reden und Aufsätze zur Geschichte der Philosophie, hg.
von H.Saner, R. Piper & Co. Verlag, München, 1968.*
Kier : Kierkegaard (1951) : in AP

註

¹ ヤスパーズは、実存を用語化する際、「実存概念」(Existenzbegriff) という言葉よりも、実存の「しるし」(signa/die Signa) という言葉を好んで使うことが多い。なぜなら、そこには、ヤスパーズによる実存を理解するための思考方法が示されているからである。そもそもヤスパーズにとって、実存とは、対象物として規定し、普遍化することで把握可能な概念 Begriff および範疇 Kategorie などではなく、むしろ、人間の持つ実存の可能性へと訴えかける記号 Zeichen を通して、自分自身に主体的に関わることでもって、理解されるべきものなのである (Ph.II S.15)。こうした実存を理解するための思考方法こそ、ヤスパーズのいう「実存開明」(Existenzerhellung) であると言える。ちなみに、この「しるし」は、『哲学』の中では、signa (Ph.II S.15) というラテン語として表記されているが、他方で、『偉大な哲学者たち—遺稿 1』(1981年)のように、die Signa (NLI S.460) というドイツ語として表記されている場合もある。

² この小論は、『哲学』(1932年)第3版以降に収録されており、ヤスパーズが自著『哲学』を執筆していた当時のことを振り返る仕方で書かれたものである。

³ この小論の原典は、*Philosophie I. Philosophische Weltorientierung* のまえがき Vorwort の後 (Ph.I S.XV) に収録されているが、その箇所に該当する邦訳は、『哲学』第三卷 (形而上学) の末尾 (275 頁) に掲載されている。

⁴ 林田新二、「B) 20 世紀ドイツの実存主義 II) ヤスパーズ」、金子武蔵編、『新倫理学事典』、弘文堂、1970 年、111 頁～112 頁。

⁵ ヤスパーズの述べる超越者とは、実存の存在を基礎づける真理そのものと呼ぶことができるが、それは、単にキェルケゴールのいうようなキリスト教の神に限定されるものではない。ヤスパーズは、のちの『真理について』の中で、「超越者の名は、無際限に集められうるものである」(WS.111) と語る。つまり、ヤスパーズによれば、超越者をとらえようとする各人の状況や立場によって、超越者は、たとえば、「存在」(Sein)・「現実態」(Wirklichkeit)・「神」(Gott) などの様々な形で称されるものとなる、としている (WS.111)。

⁶ 長文にはなるが、その文章が記されているヤスパーズの原文を以下に示す。ヤスパーズのとりあげる否定的決意についての文章と、キェルケゴールの著作の中で記されているとする否定的決意についての文章を照らし合わせながら、ヤスパーズの理解した否定的決意についての考察を充分に行うためである。「... der positive Entschluß geht ins Dasein, gewinnt seine Welt, der negative hält beständig in der Schweben. Der positive Entschluß gibt dem Leben durch Glück ... eine Sicherheit, er kann sich von Tag zu Tag weiter in den ursprünglichen Grund ... vertiefen; der negative Entschluß bleibt unsicher ohne Werden und zweideutig im Kampf mit dem Dasein, Er will nur das Ewige Er kann keinen festen Fuß in der Welt fassen,」(Ph.II S.320)。

⁷ その哲学者や研究者による指摘は、以下のとおりである。「キェルケゴールは、キリスト教から、… (略) …就職と結婚における現実には応じないとする否定的決意… (略) …などといった否定的帰結を引き出した」(Jean Wahl, *Notes on some relations of Jaspers to Kierkegaard and Heidegger* : in P. A. Schilpp (ed.) , *The Philosophy of Karl Jaspers*, Illinois, 1957, p.398.)。「彼は、殉教という「否定的決断」をした最初の弟子たちと根底的に同時代的であるような不可能なキリスト教に訴える」(ミケル・デュフレンヌ/ポール・リクール、『カール・ヤスパーズと実存哲学』、佐藤真理人訳、月曜社、2013 年、22 頁)。「ヤス

パースにとって、キェルケゴールのニヒリズムとは、「否定的」行為のことであつたのだろうか」(Ivan Alexander Muñoz Criollo, *Die Rezeption der Philosophie Søren Kierkegaards bei Karl Jaspers und Martin Heidegger*, University of Zurich, Philosophische Fakultät, 2013, S.20.)。

⁸ 引用文中の〔 〕は、本発表執筆者による補足。また、繰り返しの説明になるが、ヤスパースのとりあげる否定的決意についての文章と、この『人生行路の諸段階』の中で語られている否定的決意についての文章を照らし合わせながら、ヤスパースの理解した否定的決意について十分に考察するため、長文であるが、本文中に示した箇所該当する原文を付記することにする。以下に記した原文は、ヤスパースが主に用いたキェルケゴール著作集である、ドイツ語版ゴットシェードおよびシュレンプフ訳のものである。「Der positive Entschluß hat den großen Vorteil, daß er das Dasein konsolidiert und das Individuum in sich selbst zur Ruhe bringt; der negative Entschluß hält es beständig in suspenso. ... Der positive Entschluß gibt dem Leben durch sein glückliches Resultat Sicherheit: ... Der negative Entschluß ist immer zweideutig, auch wenn er mit Glück durchgeführt wird. ... Das Individuum hat den Kampf mit dem Dasein aufgenommen; darum ist es ... kann sich nicht, wie bei dem positive Entschluß, von Tag zu Tag weiter in den ursprünglichen Grund seines Entschlusses vertiefen. ... er kann nie festen Fuß im Leben fassen, Der negative Entschluß erfaßt nur das Ewige,」(*Stadien auf dem Lebensweg*, *GuS4* S. 93ff. ; *H15* S.112ff.)。

⁹ 引用文中の『あれか・これか』は、小川による表記。小川圭治、『人類の知的遺産（第48巻）キェルケゴール』、講談社、1979年、303頁。

¹⁰ Gregor Malantschuk, *Kierkegaard's Thought*, edited and translated by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1974, p.280. (G.マランチュック、『キェルケゴールの弁証法と実存』、大谷長訳、東方出版、1984年、303頁)。

¹¹ *idem.* (同上)。

¹² *idem.* (同上)。

¹³ *ibidem.* pp.280-281. (前掲書、303頁～304頁)。

¹⁴ セーレン・キェルケゴール、『死に至る病』、梶田啓三郎訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1996年、282頁～283頁、註42。

15 キェルケゴール研究者梶田啓三郎によれば、**Kampf ums Dasein** というドイツ語（デンマーク原語では **Kampen for Tilværelsen**）は、「人の世に生きるための戦い」を意味する、としている（同上）。ドイツ語の **mit** 「～とともに」と **um** 「～をめぐる」という意味合いの違いはあれど、**Kampf mit Dasein** も、**Kampf ums Dasein** も、どちらも「この世を生き抜くための戦い」の意と解して相違ないだろう。

16 引用文中の [] は、本発表執筆者による補足。

17 工藤綏夫、『新装版 キルケゴール—人と思想 19』、センチュリーブックス、清水書院、2014年、94頁。

18 前掲書、95頁。

19 ヤスパーズも、のちの小論「キェルケゴール」（1951年）において、キェルケゴールのキリスト教観をそのように評価する（*Kier :in AP S.299*）だ。

20 飯島宗享、「キルケゴールにおけるキリスト教と教会について」、『理想』、第269号、理想社、1955年、39頁。

21 同上。

22 飯島宗享、「キルケゴールにおける例外者について」、『實存』、No.8、実存主義研究会編、1955年、9頁～10頁。

23 同上。

24 その<関係としての自己>が登場する箇所は、次のとおりである。「人間は、精神である。しかし、精神とは何か。精神とは自己である。しかし、自己と何か。自己とは関係であるが、その関係は、関係自身に関わるのであり、言い換えれば、関係が関係自身に関わるという関係の中で関係である。自己は、関係ではなく、むしろ関係が関係自身に関わることである」（*Die Krankheit zum Tode, GuS8 S.10 ; H24 S.8*）。

25 その研究者たちの指摘に関して言えば、たとえば、次のものを挙げることができるであろう。Werner Schüßer, *Jaspers zur Einführung*, Junius Verlag GmbH, 1995, S.75.（ヴェルナー・シュスラー、『ヤスパーズ入門』、岡田聡訳、月曜社、2015年、101頁）。布施圭司、『ヤスパーズ 交わりとしての思惟—暗号思想と交わり思想—』、昭和堂、2016年、18頁。中山剛史、『ヤスパーズ 暗黙の倫理学—<実存倫理>から<理性倫理>へ』、晃洋書房、2019年、278頁。梶形公也、「第二章 実存主義 I—キェルケゴール、ヤスパーズ—」、小熊勢

記・川島秀一・深谷昭三編、『西洋倫理思想の形成 II—20 世紀の倫理学—』、晃洋書房、1986 年、33 頁。

²⁶ Wolfdietrich von Kloeden, *Einfluß und Bedeutung im deutsch-sprachigen Denken* : in Nils Thulstrup and M. Mikulová Thulstrup (ed.) , *Bibliotheca Kierkegaardiana. vol.8. The Legacy and Interpretation of Kierkegaard*, C.A.Reitzels Boghandel, Copenhagen, 1981, S.90.

²⁷ Werner Schüßer, *Jaspers zur Einführung*, S.45. (ヴェルナー・シュスラー、『ヤスパース入門』、岡田聡訳、61 頁)。

²⁸ a.a.O. S.46. (前掲書、62 頁)。

²⁹ 引用文中の [] は、本発表執筆者による補足。

³⁰ 中山剛史、『ヤスパース 暗黙の倫理学—〈実存倫理〉から〈理性倫理〉へ』、185 頁。

³¹ 林田新二、『ヤスパースの実存哲学』、弘文堂、1971 年、14 頁。

³² Jean Wahl, *Notes on some relations of Jaspers to Kierkegaard and Heidegger* : in P. A. Schilpp (ed.) , *The Philosophy of Karl Jaspers*, Illinois, p.394.

³³ ポール・リクールも、この文をとりあげて、ヤスパースは、キェルケゴールとニーチェという例外者を超えつつ、理性の備わった新しい実存についての探求を試みていた、と主張する (ミケル・デュフレンヌ/ポール・リクール、『カール・ヤスパースと実存哲学』、佐藤真理人訳、24 頁～25 頁)。

³⁴ 飯島宗享、「キェルケゴールにおける例外者について」、13 頁～14 頁。

³⁵ 前掲書、14 頁。

³⁶ 前掲書、16 頁。

³⁷ その該当箇所は次のとおりである。「この両者の違いは、実存することの現実をキリストに関わることに限定するか、世界存在に関わることに見るかの違いにある」(布施圭司、「キェルケゴールとヤスパース—現実の意義をめぐって—」、『コミュニケーション』、第 10 号、日本ヤスパース協会、1999 年、43 頁)。